千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第13号　51～62（2017）
調査

ジュニアオーケストラ運営とファンドレイジング

― 千葉県少年少女オーケストラを事例として ―

影山　美佐子

Management and Fundraising of Junior Orchestras

Misako KAGEYAMA

Abstract

Today, a wide variety of amateur orchestras is performing their activities lively. Among them, junior orchestras differ from the orchestras by adults in their purpose of establishment and management issues. The activities of the junior orchestras have a synergistic effect with music education at school and contribute to the promotion of the music culture in the region together with brass and choral activities. Furthermore, their presence at domestic and overseas performances contributes to the enhancement of their regional brand and to promote the interregional exchanges with both domestic and foreign cities. In addition, a high economic ripple effect has been brought about by their concerts and other events. On the other hand, with their financial situation that the total expenditure in administrating the junior orchestras can not be fully covered with their performance income, subsidies and donations are considered to be essential resources for the activities. As the importance of fundraising in nonprofit organizations is increasing, junior orchestras are also expected to have their own fundraiser inside to procure necessary resources, so that they, as “treasure of the region”, would continue to contribute to the appeal of the cities, by promoting culture with excellent performances and being highly evaluated globally.

Key-words

Junior Orchestra / Amateur Orchestra / Fundraising / Fundraiser / Giving Market

はじめに

国内では多くのアマチュアオーケストラが活動している。インターネットサイトFREUDEでは、2016年12月末現在1,000を超える団体が紹介されている（FREUDE, 2016）。本稿では、アマチュアオーケストラを「演奏により生計を立てていない弦楽器、管楽器、打楽器奏者が集まった、主にクラシック音楽を演奏する集団で、成人・社会人を主なメンバーとするもの」（畑農敏哉, 2015, 4）と定義し、市民オーケストラ、大学のオーケストラに加えてジュニアオーケストの活動を含めている。

ジュニアオーケストラがその目的を達成し地域活性化効果を発揮するためには、恒常的に練習できる場の確保、優れた指導者に恵まれること、発表の場（演奏会など）の機会を持つことなどが必要である。ジュニアオーケストラの運営主体はほとんどが非営利組織であり、行政からの補助や企業・地域などからの寄付、そして保護者の負担によって成り立っている。しかし近年、発足当初は主な助成団体であった地方公共団体からの補助金等は必ずしも十分なものとは言い切れない状況になっている。

そこで、本稿では、千葉県少年少女オーケストラを事例として、その活動状況と成果、課題等を検証し、今後のジュニアオーケストラ運営についてのファンドレイジングを検討したい。

１．ジュニアオーケストラの現状

ジュニアオーケストラでは、費用は団員である青少年によってではなく、設立母体や保護者が負担している。ジュニアオーケストラの多くは、地方公共団体などによって、音楽教育の一環として青少年の健全育成と文化向上を目的に結成されており、都市のイメージアップ効果や国内外の青少年交流・国際交流などに寄与することが期待されてきた。

ジュニアオーケストラの波及効果としては、地域の文化力を高め地域の活性化が図られることがある。その対象となるのは、奏者としての青少年だけでなく、保護者、指導者、支援者（企業、団体、個人など）、文化芸術団体や地元の住民、大学、企業、演奏会場、そして演奏会関係者（練習等で利用されるバス・タクシーなど交通機関やレストランなど飲食関係も含まれる）など様々な分野に波及している。

さらに、演奏会等によりその活動を国内外へ発信することで、地域のブランディング向上に資することや、国内外でのジョイントコンサートなどにより国際交流の親善大使としての役割を発揮するなど、地域間交流の活性化に貢献することができる。

また、文化芸術のイベントには経済波及効果が見込まれる。海外においても優れた文化芸術のある地域は著名な観光地域として、MICE開催地として多くの国内外の来客を誘引している。

地域で活動しているわが国のジュニアオーケストラには次のような例がある。

① 岡山市ジュニアオーケストラ（岡山市ジュニアオーケストラ, 2016）

岡山市ジュニアオーケストラは1965年１月に結成され、1966年１月に第1回定期演奏会を開催している。結成当時は、事務局を岡山市教育委員会に置いていたが、1992年４月から岡山市スポーツ・文化振興財団へ管理運営を委託している。

このジュニアオーケストラは、1970年８月の日本万国博覧会に出演し、1973年にはサンノゼシンフォニーオーケストラとの交歓演奏会を行うなど、国際交流にも活躍している。1976年11月には岡山県教育委員会功労賞を、2005年４月には岡山芸術文化功労賞を受賞するなど、岡山市の文化向上に寄与している。また、仙台ジュニアオーケストラとのジョイントコンサート、カリフォルニアユースシンフォニーとのジョイントコンサートなども行い、国内外での青少年交流を推進し、岡山の魅力となっている。

② 仙台ジュニアオーケストラ（仙台ジュニアオーケストラ, 2016）

仙台ジュニアオーケストラは、仙台市の音楽文化の一層の振興と発展を図ることを目的に、1990年５月に発足した。仙台ジュニアオーケストラの団員は、公募による選考で選ばれた小学校5年生から高校２年生までの児童・生徒で構成されている。音楽監督には、上野大学非常勤講師の平川範幸氏を招き、また講師として仙台フィルハーモニー管弦楽団のメンバーが指導している。大きな特徴として、設立当初からプロのオーケストラによる指導を常時受けられたことがある。秋の定期演奏会と春のスプリングコンサートを中心に、国内外のジュニアオーケストラとのジョイントコンサートなども積極的に行っている。

③ ジュニアオーケストラ浜松（ジュニアオーケストラ浜松, 2016）

ジュニアオーケストラ浜松は、1964年児童会館少年音楽隊として発足し、1994年５月に現在のジュニアオーケストラ浜松が設立された。2005年３月に朝日新聞「音楽教育振興賞」（顕彰部門）を受賞するなど優れた演奏を行っている。団員代表の神農智子氏は「私は、ジュニアオーケストラ浜松には、音楽の街のオーケストラとして皆さんに素敵な音楽をお届けする責任があると考えています。少しでも『音楽っていいな』と思っていただけるような演奏ができるように、団員みんなで力を合わせ、切磋琢磨して練習していきたいと思います」と語っている。

④ トリフォニーホール・ジュニア・オーケストラ（トリフォニーホール・ジュニア・オーケストラ, 2016）

トリフォニーホール・ジュニア・オーケストラは、2005年10月に弦楽オーケストラとして設立され、翌2006年２月に第１回定期演奏会を開催。同2006年９月

から管・打楽器を含めた編成に拡大し、フルオーケストラとして活動を開始した。音楽監督の松尾陽子氏をはじめ、新日本フィルハーモニー交響楽団のメンバーなどプロの音楽家の指導を受け、その音楽性に直に触れながら、技術力・表現力を養っている。すみだトリフォニーホールを主な練習会場とし、子どもたちが音楽面でも精神面でも成長していく場を提供すべく、地域に豊かな音楽文化が根付くための一歩となるものとして年２回の定期演奏会をはじめ広く地域で様々な演奏活動を展開している。

これらのジュニアオーケストラは、それぞれ定期演奏会を中心に数々の演奏会を開催し続けており、地域におけるレガシーとしての魅力を持っている。プロの演奏者などの優れた指導者により継続した指導を受けていることや定期的な演奏機会を持っていること、また、それぞれの成果を発信することによって地域の人々に支えられていることなどが見られる。支援者にとってもその成果を確認できることで次への支援につながっている。

２. 千葉県少年少女オーケストラ

(1) 千葉県における文化芸術振興

千葉県は、文化芸術振興基本法（平成13年法律第148号）に定められた地方公共団体の責務に関する規定である、「基本理念にのっとり、文化芸術の振興に関し、国との連携を図りつつ、自主的かつ主体的に、その地域の特性に応じた施策を策定し、及び実施する責務を有する」（第４条）に基づき、「千葉県総合計画」（2009 ～ 2012年）を踏まえ、中長期的な視野に立ち、千葉県の文化芸術分野における基本目標や施策の方向性を定めた「ちば文化振興計画」を2012年に策定し、文化振興を図ってきた。

千葉県においても少子高齢化や東日本大震災からの復興、「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律（平成24年法律第49号）」の施行や「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会」の開催決定などにより、文化芸術を取り巻く環境もさまざまな変化があった。このような変化に対応し、「ちば文化の創造と千葉県民のアイデンティティの醸成でつくる心豊かな県民生活と活力ある千葉県」の実現に向けて、県民をはじめとして、県、市町村、文化芸術団体、企業等が連携・協力し、総合的かつ効果的な文化振興施策の推進を図るため「第２次ちば文化振興計画」（2016 ～ 2020年）が策定されている。

この計画づくりに当たり、千葉県は県政に対する世論調査等において、県民の文化・芸術活動に関する意識調査を行っている。この意識調査に基づいて、千葉県の現状を見ておこう。

① 芸術や文化に親しむ機会について（千葉県環境生活部県民生活・文化課, 2016, 37）

「満足している」24.2％、「不満である」21.5％、「無回答またはどちらともいえないまたはわからない」54.3％　となっており、2010年度から５年間ではほぼ横ばいである。

② 県民の文化芸術活動について（千葉県環境生活部県民生活・文化課, 2016, 38-42）

特に関心をもっている文化芸術では、「自然（動物・植物）、科学、産業など」で、38.3％と最も高く、つぎに「映画、漫画、アニメなど」34.6％、「美術（絵画、彫刻、工芸、陶芸など）」26.0％となっており、クラシック音楽は16.2％であった。「特にない」との回答も13％あった。

この１年間で、県内でふれた文化芸術では、「映画、漫画、アニメなど」23.7％、「自然（動物･植物）、科学･産業など」21.2％、「クラシック音楽」7.1％であり、「鑑賞したりふれたりしたものはない」が29.5％と最も多かった。

文化芸術にふれなかった理由を聞いており、「家庭などでテレビ、DVDなどのメディアで鑑賞しているから」31.7％と最も多く、「仕事等（育児・介護等を含む）で忙しくて出かけられないから」29.3％、「興味のある内容の文化芸術の催し物がないから」23.7％、「催し物の情報が得られないから」23.7％、「自分の都合の良い日時に開催されていないから」22.1％、「他県（東京都を含む）の文化施設を利用するから」14.3％、「文化芸術に対し、そもそも関心がないから」13.8％、「近隣に文化施設等がないから」10.6％となっていた。

地域の文化的環境に必要なことでは、「子どもたちが文化芸術に親しむ機会の充実」47.5％、「地域の芸術

や祭りなどの継承・保存」39.0%、「地域の文化に関わる情報の提供」34.1%となっている。

文化芸術を振興するために県が果たす役割では、「青少年が文化芸術に親しむ機会の充実」43.3%、「優れた音楽会や展覧会などの鑑賞機会の充実」35.4%、「文化芸術に関する情報の提供」33.4%となっている。

③　文化芸術団体の活動状況（千葉県環境生活部県民生活・文化課, 2016, 44）

県域芸術文化団体（23団体）への2015年８月24日～９月30日に行ったアンケート結果では会員数は、最小35名、最大23,000名で平均2,771名だった。

会員の平均年齢は、「60 ～ 69歳」が最も多く50.0%、次いで、「50 ～ 59歳」、「40 ～ 49歳」で13.7%、「70歳以上」が9.1%で、40歳未満は最も少なくなっている。

成果発表の実施頻度は、年１回が50%で最も高かった。

団体として活動する際に不満や不便を感じているかという問いに対して、「新加入者が少ない」「参加費、活動費など経費がかさむ」がともに68.2%と高かった。

団体の悩みでは、会員の高齢化、新規会員の加入が少ないこと、また伝統芸術文化の後継者育成事業をするためには費用負担が大きく活動が難しいこと、定期的な公演（成果発表など）を行うには会場の確保と経費がかかること、公費補助削減により活動が制約されていることなどが記載されている。

④　文化芸術活動を行っているNPO団体の活動状況（千葉県環境生活部県民生活・文化課, 2016, 53-56, 59, 63）

千葉県内で「学術、文化、芸術またはスポーツ」を活動分野としている千葉県及び千葉市で認証されているNPO法人685法人に対して、2015年10月１日～ 10月21日行ったアンケート結果では、活動実人員では、「10から19人」が最も多く27%であった。

活動実人員の平均年齢は、「60 ～ 69歳」が27.8%、次いで「50 ～ 59歳」が23.8%となっている。

主な文化芸術活動では、「音楽演奏」35.2%が最も多く、「美術創作」26.4%、「アーティスト演奏家等の育成・支援」23.1%と続いている。

成果発表会等の実施状況では、「年2 ～ 5回」が34.1%で最も高く、「年1回」が19.8%、「月に1 ～ 2回」15.4%である。

「法人としての課題」については、「活動資金の不足」58.4%、「運営スタッフの不足」56.2%、「団体の高齢化」44.9%となっている。

「国や県に期待すること」については、文化芸術活動の実践に向けた相談や支援体制の充実、優れた公演会・展示会などの鑑賞機会の充実、公演場所の無料提供や若い芸術家への支援などが記載されている。

以上が千葉県が行っているアンケート等からみられる文化芸術に関する状況である。

自治体への要望事項としては、子どもたちが優れた文化芸術にふれる環境づくりに対して期待していることがわかる。また、地域での鑑賞の機会を得ることや演奏会等の情報を上手く提供することが求められている。千葉県の人口分布をみると千葉・東葛飾地域にその７割が居住し、東葛飾地域の県民は勤務地が東京であることも多く、東京でのコンサートや観劇等県外での文化芸術活動も多いことが実態である。一方で、県立文化会館は千葉市、館山市（南房総地域）、旭市（北総地域）にあるが、620万人の千葉県民がもっと県内で文化芸術活動に参加し、その活動を支える参加者になるよう情報発信をしていく必要があるだろう。

前述の調査回答に見られた、それぞれの団体が、若い新規会員の加入が少ないことや、財源の確保に苦慮していることなどにより、それぞれの活動状況がうまく発信されていないように見える。非営利組織では、運営のための資金集めをするためには、活動目的を明確に示し、その成果を発信することが最も重要である。

(2) 千葉県のアマチュアオーケストラの状況

千葉県は小中高校・大学のオーケストラ部、ジュニアオーケストラ活動が盛んである。船橋市などの小中学校には管弦楽部があり、県立千葉高校、県立千葉女子高校、県立幕張総合高校などにオーケストラ部がある。学校以外でも千葉県少年少女オーケストラをはじめとして、市響ジュニアオーケストラ（市川市）、柏ジュニアオーケストラ、船橋ジュニアオーケストラ、かずさジュニアオーケストラなどが活動している。千葉交響楽団協会に加入

しているアマチュアオーケストラはジュニアオーケストラも含めて2015年８月６日現在で24団体である（千葉県少年少女オーケストラをはじめとしてジュニアオーケストラはほとんどが加盟せずに活動している）（千葉県交響楽団協会, 2015）。

2016年８月には、日本アマチュアオーケストラ連盟主催の第44回全国アマチュアオーケストラフェスティバル千葉県大会も開催されている。

また、ジュニアオーケストラ活動と併せて千葉県内では吹奏楽も盛んであり、2015年度の「千葉県吹奏楽連盟」の加盟団体は711で、小学校139団体、中学校339団体、高等学校164団体、大学９団体、職場４団体となっている（千葉県吹奏楽連盟, 2016, 139）。

(3)　千葉県少年少女オーケストラ

①　全国初の都道府県レベルのジュニアオーケストラの誕生

千葉県少年少女オーケストラは、全国初の都道府県レベルのジュニアオーケストラとして1996年に、佐治薫子氏を音楽監督に招き、子どもたちの豊かな心を育て、県民にオーケストラの素晴らしさを知ってもらえるように結成された。当時の千葉県知事沼田武氏が代表となり、財団法人千葉県文化振興財団（現在の公益財団法人千葉県文化振興財団）が運営し、2015年度に20周年を迎えている。

初公演は、1996年７月の全国知事会議「交歓会」で行われた少年少女100名の演奏であった。短期間の練習ではあったが、千葉県少年少女オーケストラのモットーである「よい音で、よい演奏を」を目標にして、団員は熱心に心を一つにして猛練習を行い当日美しい調べを奏でた。この演奏は全国の知事に衝撃を与え、千葉県少年少女オーケストラの素晴らしさは評価され、現在まで弛まぬ努力を続けている。

②　演奏会の実績

音楽監督として指導している佐治薫子氏は、小中学校の教師として、ひたすら音楽教育に情熱を傾け、40数回も子どもたちを全国優勝へと導き、千葉県の音楽教員を退職後千葉県少年少女オーケストラを率いている。佐治薫子氏は、教員として在職中からテレビ出演や『バッハ先生と1000人の子どもたち』、『ひろがれぼくらのハーモニー』（いずれも森玲子著）のモデルとなっており、「サントリー地域文化賞」、「千葉県文化功労賞」、「国際ソロプチミスト社会貢献賞」、「キワニスクラブ教育文化奨励賞」など数多く受賞している。佐治薫子氏にあこがれて千葉県の音楽教師になった者も数多い。また、佐治薫子氏の教え子には現在プロとして活躍している奏者が数多くいる。

千葉県少年少女オーケストラでは、この素晴らしい佐治薫子氏をはじめ、氏の教え子であるプロの演奏者がパート練習の指導者として直に子どもたちを指導している。常に最高の音を奏でることを目指す音楽監督の指導を受けて団員たちは腕を磨いている。

毎年３月に行われている定期演奏会などでは、国内外の一流の指揮者が子どもたちを率いて演奏している。過去には故石丸寛氏、故冨田勲氏、故宮川泰氏をはじめとして著名な指揮者が招かれた。また、井上道義氏が定期演奏に加えてサントリーホール19周年記念ガラコンサートや韓国公演、ヨーロッパ公演でも指揮している。加えて、宮川彬良氏は恒例となった夏のコンサート「アキラさんの大発見コンサート」を10年以上指揮しており、子どもたちともすっかり仲良くなっている。さらに、現田茂夫氏、山下一史氏、山田和樹氏など著名な指揮者が参加している。

また、定期演奏会時などに国内外で活躍するソリストの参加もあり、バリトンの福島明也氏、ピアニストの長島達也氏、河村尚子氏などが子どもたちと共演している。（表１を参照。）

表１　千葉県少年少女オーケストラ定期演奏会　（千葉県・千葉県文化振興財団, 2016）

	年　月	指　揮　者	ソリスト（演奏内容）	その他海外公演等
第１回	1997.3	故　石丸　寛		結団式　1996.6
第２回	1998.2	現田　茂夫		ウイスコンシン州公演1998.3
第３回	1999.3	井上　道義	バリトン　　福島　明也 　マーラー　子どもの不思議な角笛より	
第４回	2000.3	現田　茂夫	ピアノ　　長島　達也 　ベートーベン　ピアノ協奏曲第5番	
第５回	2001.3	ｸﾘｽﾃｨｱﾝ･ｱﾙﾐﾝｸ		
第６回	2002.3	現田　茂夫	ヴァイオリン　漆原　朝子 　チャイコフスキー　ヴァイオリン協奏曲	NHK生放送2003.2
第７回	2003.3	山下　一史		NHK生放送2003.8
第８回	2004.3	現田　茂夫	クラリネット　川井　夏香 　モーツァルト　クラリネット協奏曲	NHKハイビジョンバック
第９回	2005.3	山田　和樹	ソプラノ　　永﨑　京子 　プッチーニ　歌劇「ジャンニ・スキッキ」より 　”私のいとしいお父さん”他	韓国公演　2005.8 NHKハイビジョンバック
第10回	2006.3	現田　茂夫	ソプラノ　　澤畑　恵美 メゾ・ソプラノ　竹本　節子 テノール　　田中　　誠 バス　　福島　明也 合唱　神奈川フィル合唱団 　ベートーベン　交響曲第９番（合唱付き）	NHK総合全国放送 「人間ドキュメント」
第11回	2007.3	井上　道義		「題名のない音楽会」
第12回	2008.3	現田　茂夫	チェロ　　川井真由美 　ドヴォルザーク　チェロ協奏曲	
第13回	2009.3	井上　道義		ヨーロッパ公演2010.3 NHKBSスポット放映
第14回	2010.3	金　　聖響		
第15回	2011.4	佐渡　　裕	ソプラノ　　並河　寿美 メゾ・ソプラノ　谷口　睦美 テノール　　福井　　敬 バス　　福島　明也 合唱　東京オペラシンガーズ 　ヴェルディ　レクイエム	NHKハイビジョンバック
第16回	2012.3	下野　竜也	ピアノ　　河村　尚子 　ブラームス　ピアノ協奏曲第１番	東総公演2012.3
第17回	2013.3	井上　道義		
第18回	2014.3	飯森　範親	ヴァイオリン　成田　達輝 　ブルッフ　ヴァイオリン協奏曲	
第19回	2015.3	チョン･ミン		
第20回	2016.3	下野　竜也	ソプラノ　　佐々木典子 メゾ・ソプラノ　寺谷千枝子 テノール　　吉田　浩之 バリトン　　福島　明也 合唱　東京オペラシンガーズ 　ベートーベン　交響曲第９番（合唱付き）	

定期演奏会は毎年3月に千葉県文化会館を会場として行い、夏には恒例の「アキラさんの大発見コンサート」を千葉県文化会館、東総文化会館、東金文化会館、習志野文化ホール、鳥取県倉吉未来中心、市川市文化会館などで開催している。

これらの支援により、千葉県少年少女オーケストラの運営が行われている。演奏会のアンケート結果から、ほとんどの来場者が演奏に満足しており、青少年のオーケストラの演奏に感動し、これからの活動に対しても期待していることがわかる（表２）。

表２　千葉県少年少女オーケストラ演奏会の満足状況（千葉県文化振興財団, 2016）

	2011.8	2012.3	2012.8	2013.8	2014.8	2015.3	2015.8	2016.3
満　　足	96.0	88.6	95.7	95.1	97.7	88.2	95.1	92.6
やや満足	3.0	8.6	3.0	4.3	2.3	8.6	4.2	7.4
普　　通	1.0	2.9	0.4	0.6	0	3.2	0.7	0
やや不満	0	0	0	0	0	0	0	0
不　　満	0	0	0	0	0	0	0	0
（＊）	夏コン	定　演	夏コン	夏コン	夏コン	定　演	夏コン	定　演

＊千葉県文化会館で開催された「定期演奏会」（定演）及び「アキラさんの大発見コンサート」（夏コン）

③　海外での演奏会の実施

千葉県少年少女オーケストラは、米国（ウィスコンシン州）、韓国（高陽市、ソウル市）、ヨーロッパ（ドイツデュッセルドルフ市、ケルン市、ブルガリアソフィア市）への海外公演を行っている。現地でのジョイントコンサートなどを経験（招待演奏会）するとともに、訪日したユースオーケストラとのジョイントコンサートなども行っている。千葉県の友好親善大使としての千葉県の国際交流を推進する役割を果たし、千葉の都市イメージアップにも貢献している。（表３を参照。）

表３　海外での演奏会と国際交流　（千葉県・千葉県文化振興財団, 2016）

	日　程	事　　業	事　　業　　内　　容	指揮者・ピアニスト
ウィスコンシン州公演 （アメリカ合衆国）	1998 3/24-31	千葉県文化使節派遣事業	○ウィスコンシン・ユース・オーケストラとのジョイントコンサート ○州知事訪問 ○メモリアル高校での演奏会 ○モノナテラス（サンキューパーティ）での演奏	ピアニスト 長島達也氏 指揮者 佐治薫子氏
ウィスコンシン州 （アメリカ合衆国）	1999 6/12	使節団受け入れ	○ミルウォーキー少年少女合唱団との交流演奏会	指揮者 佐治薫子氏
イギリス	2001 7/29	使節団受け入れ	○バーミンガムスクール交響楽団との合同演奏 ○交流会	指揮者 佐治薫子氏
韓国	2002 11/17	日韓交流イベント	○JAPAN-KOREA市民交流フェスティバルで演奏	指揮者 佐治薫子氏
韓国公演	2005 8/19-22	日韓交流年記念事業	○ゴーヤン・コンサート・ホール（高陽市）演奏会 イルサン・チェンバー・オーケストラとの合同演奏 ○セジョン・センター（ソウル市）演奏会	指揮者 井上道義氏
ドイツ	2006 11/4	使節団受け入れ	○デュッセルドルフ交響楽団演奏会で演奏	指揮者 川瀬賢太郎氏
メキシコ	2008 9/15	日本メキシコ友好400年記念事業	○日本メキシコ400年記念オペラ「夕鶴」で演奏	指揮者 ジェームズ・デムスター氏
メキシコ	2008 9/23	日本メキシコ友好400年記念事業	○日本メキシコ400年記念黒沼ユリ子「夕鶴」コンサートで演奏	指揮者 ジェームズ・デムスター氏 佐治薫子氏
ヨーロッパ公演 （ドイツ・ ブルガリア）	2009 3/25- 4/3	ヨーロッパ３都市からの招待事業	○トーンハレ・デュッセルドルフ （ドイツ・デュッセルドルフ市）演奏会 ○ブルガリアホール（ブルガリア・ソフィア市）演奏会 ○ケルナー・フィルハーモニー （ドイツ・ケルン市）演奏会（ボーフム音楽学校ユース・オーケストラと合同演奏）	指揮者 井上道義氏

④　資金調達

ジュニアオーケストラを運営するためには、運営スタッフの人件費や指導者への報償費、演奏会プログラム作成などの広報費、会場使用料、楽器修理費などが必要となる。千葉県少年少女オーケストラの場合は千葉県から会場は提供されているが、年間の運営費用は5,600万円を超えている（公益財団法人千葉県文化振興財団, 2016）。

千葉県少年少女オーケストラを発足当初から運営している公益財団法人千葉県文化振興財団に対しては、千葉県少年少女オーケストラの運営のために千葉県や文化庁から多額の補助金が交付されているが、それでも演奏会入場料では運営費を賄うことができず、千葉県少年少女オーケストラを支える会からの寄付に頼っている状況である。

公益財団法人千葉県文化振興財団2015年度決算報告書によれば、千葉県少年少女オーケストラの運営に対しては、千葉県から「千葉県文化振興財団総合文化振興事業費補助金（人件費）」27,734,000円及び「同補助金（事業費）」8,000,000円が交付されており、また、文化庁から「文化芸術振興費補助金劇場・音楽堂等活性化事業」12,036,716円が交付されており（公益財団法人千葉県文化振興財団, 2016）、補助金の合計は47,770,716円となっている。一方で、定期演奏会の入場料収入と千葉県少年少女オーケストラを支える会（企業・個人）からの寄付（2016年３月末現在638件）などからなる「千葉県少年少女オーケストラ事業収益」は8,571,100円（公益財団法人千葉県文化振興財団, 2016）で、収入の15.2％にとどまっており、将来的に不確定な外部の資金に依存している状況である。昨今の地方公共団体の財政状況を考えると、補助金が今後も維持されるかどうかは不透明であり、自主的な財源の確保が必要である。

３．ジュニアオーケストラの課題

つぎにジュニアオーケストラの課題を論じておく。

千葉県少年少女オーケストラの事例をみると、10歳から20歳の児童・生徒にとっての練習は土日に限定されている。しかも、県下全体から集まって来る団員であることから、コミュニケーションが十分に取れるとは言い難い。その中で、ルールを守ること、年長者は年少者をいたわり導くことや手本となることなど社会生活で必要とされることを学ぶ場となっている。このようにジュニアオーケストラには音楽を通じての青少年教育がなされている。

団員である青少年が演奏会等で練習成果を遺憾なく発揮し、ジュニアオーケストラが地域活性化効果を創造していくためには、「演奏者」、「演奏会に参加する人」、「演奏することを支える人」の三者が必要である。

「演奏者」である青少年は、学業との両立を考えなくてはいけない。近年は土曜日授業の学校もあり、大学においても土曜授業だけでなく祝祭日の授業もあるため、オーケストラとしての全体練習は限られてしまう。

また、各ジュニアオーケストラによって年齢の幅も違っているが、受験などにより、年間を通じて練習できない場合もある。千葉県少年少女オーケストラは都道府県レベルなので、子どもたちは県内各地から集まって来る。そのため、自然災害（台風など）や交通機関の乱れなどにより集まれないときがある。

「演奏会に参加する人」は「演奏することを支える人」にもなるだろう。演奏会を聴くことや会場整備、ボランティアなども含めて多くの関係者が携わっている。演奏者の保護者はもとより、音楽監督、練習時の指導者、指揮者、助成している地方公共団体、関係団体、企業・個人など寄付者、演奏会のための交通機関（バス、タクシーなど）や飲食関係などサービス業の様々な分野に関わってくる。この三者の連携がうまくいくことが重要である。ジュニアオーケストラの運営はほとんどが非営利組織であり、音楽愛好家、青少年育成に熱心な人たちが設立、運営にあたっていると思われる。これらのジュニアオーケストラが人や場所を確保したとしても演奏会の入場料収入では運営費用をとうてい賄うことはできない。自治体等と連携し、場所や補助金を得たとしても十分ではなく、さらに寄付金が必要となっていることは、千葉県少年少女オーケストラの運営資金の決算状況で見たとおりである。また、補助金は将来にわたって保証されたもの

ではなく、国や地方公共団体の財政難から減額される可能性もある。このため自主的な財源確保とそのための優れたスタッフの育成が必要となっており、文化芸術団体にとっての悩みがジュニアオーケストラについても同様であることがわかる。他の団体との違いは、青少年が団員であり、しかも年齢制限があることから高齢化していくことはない。ただし、人口減少時代に入り、魅力ある活動を続けていけないと新たな団員を確保することが難しくなるだろう。

４．助成の必要性と意義

前述の「資金調達」の項で述べたとおり、ジュニアオーケストラの運営に当たっては、演奏料収入で総支出を賄えるものではなく、補助金や寄付金はなくてはならない財源となっている。

筒井隆志氏によれば「文化・芸術関連の産業は各国のGDPの３～６％を占めており、また労働集約産業であるためマクロ経済に与える効果や雇用創出効果は大きい。」しかし、「この分野は、人口・資本の集積の進んだ都市以外では事業が成り立たないことが多く、地方における展開には限界がある。したがって、文化・芸術による地域振興を考えた場合、何らかの助成・赤字補填が不可欠であろう。」とされる（筒井隆志, 2012, 9）。そして、同氏は「文化・芸術分野を地域の活性化に役立てようという場合、その方法は大別して、①地域に昔からある文化・伝統工芸品産業の活性化、②地域に立地する①以外の文化・芸術産業のPRや活性化、③博物館、美術館、劇場、スポーツ競技場などの常設的な文化施設の建設・運営、④地域の祭りなどのイベントの活性化、新規のイベントの創設という道筋をとることになろう」（筒井隆志, 2011, 110）と述べられている。

ジュニアオーケストラの活動は①～④で紹介された事例に当てはまっている。

各地域におけるジュニアオーケストラも同様の効果を上げており、子どもから高齢者までが参加できる取り組みであること（演奏者としての参加だけでなく、コンサートを聴くことや、運営を補助金の交付や寄付により支えることも含めての参加）から、今後の地域における文化GDPを増加させるためにも助成していくことが必要であろう。他方で、精神面での満足感による豊かな生活を求めることが今後ますます必要になってくると考えられる。特にジュニアオーケストラは次代を担う子どもたちの感性を磨くという大きな特徴を持っており、助成は未来への投資と言えよう。

５．日本の寄付市場とファンドレイジング

ファンドレイジングとは、本来資金の獲得という意味であり、広義では、営利企業、行政、非営利組織、個人などあらゆる主体による資金獲得、資金開拓を含むもので、獲得する資金も、出資金、会費、売上金、寄付金、助成金、補助金、受託金などあらゆる資金が含まれる。本稿では寄付金を中心に考察する。

日本ファンドレイジング協会が日本における寄付市場の状況等を取りまとめて『寄付白書2015』を発行している。同書はこれまでの寄付白書の総括版として過去5年にわたる情報を一覧にしている。以下、本書に依拠してわが国の寄付市場の概要を示しておく。

① 2014年の日米英３か国の個人寄付総額比較（日本ファンドレイジング協会, 2015, 12）

アメリカ　約27兆3,504億円（名目GDP比：1.5％、為替レート：１ドル＝105.8円）

イギリス　約１兆8,100億円（名目GDP比：0.6％、為替レート：１ポンド＝170.8円）

日本　約　7,409億円（名目GDP比0.2％）

となっており、名目GDPに占める割合は、米国の７分の１以下、イギリスの３分の１である。

② 法人寄付は6,986億円で、法人所得に占める割合は1.4％である。この2013年度法人寄付の分野構成をみると、教育・研究が最も多く34.0％、次いで文化・レクリエーション18.8％であった（日本ファンドレイジング協会, 2015, 13）。

③ 寄付先を選ぶ際に重視したことは、「寄付金の使い道が明確で、有効に使ってもらえること」「活動の趣旨や目的に賛同・共感・期待できること」が最も多く、つぎに「寄付の方法がすぐにわかり簡便であること」となっている。特に、５万円以上の寄付者

にあっては「活動の趣旨や目的に賛同・共感・期待できること」を50％以上が重視したと答えている（日本ファンドレイジング協会, 2015, 38）。

④　また、寄付者の４割以上が「魅力的な寄付先が見つかれば寄付をする」と答えており、寄付市場の拡大可能性は高いことがわかる（日本ファンドレイジング協会, 2015, 40）。

⑤　寄付についての考えについて、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と答えた割合の多い順は、「寄付を活かして社会にどう変化が生まれたのか知りたい」「寄付をするならば税制優遇はあったほうがよい」次いで「寄付は未来社会への投資だと思う」となっている（日本ファンドレイジング協会, 2015, 40）。

⑥　個人寄付の状況は、2012年の推計寄付者数は4,759万人、個人寄付総額は6,931億円と推計され、震災前の水準を上回っている。東日本大震災を経て、日本の個人寄付総額は増加傾向にあることがわかる。震災後間もないことから寄付金額の上位は「緊急災害支援」「国際協力」となっているが、次いで「芸術文化・スポーツ」、「子ども・青少年育成」が多くなっており、未来社会への投資という考え方がうかがえる。この分野については、震災前と比べても大幅に増加している（日本ファンドレイジング協会, 2015, 68）。

⑦　また、個人会費総額はおよそ3,000億円の規模で推移しており、芸術文化・スポーツ分野が多くなっている（日本ファンドレイジング協会, 2015, 70）。

⑧　個人寄付の動機として、「社会貢献意識」、「自己表現・自分自身のため」などが増加している（日本ファンドレイジング協会, 2015, 78）。

⑨　寄付者の意識や考え方では、「助け合いや社会貢献のあらわれである」「市民が社会に参加する大切な手法の一つである」「今後、日本でもっと寄付が進むようになるとよい」等の考え方が増加している（日本ファンドレイジング協会, 2015, 86）。

⑩　寄付市場のおける５つの重要なポイント（日本ファンドレイジング協会, 2015, 92-128）

a　寄付市場拡大のカギを握るシニア層の寄付

過去最高の高齢者数・高齢化率の中、シニア層のNPOへの関心が高いことに加え、シニア層は他の世代よりも寄付者比率が高く、寄付単価も高いことなどが挙げられている。

b　寄付市場を拡大させた震災寄付

東日本大震災では「寄付」が支援の手段として強く認識された。日本ファンドレイジング協会の推計では、日本の2011年の15歳以上人口１億280万人の76.9％にあたる8,512万人が東日本大震災への寄付を行っており、通常寄付の２倍以上の人が寄付を体験した。

c　主体的で積極的な高額寄付者

高額寄付者が、寄付先の団体を信頼する根拠としては「これまでの活動実績」が最も重要視されている。

d　2009年から2012年までの寄付に関する政策・制度の変化

2011年新寄付税制の施行で寄付者メリットが拡大し、2012年には「特定非営利活動促進法の一部を改正する法律」が施行され認定NPO法人の取得がしやすくなった。

e　寄付教育と寄付関連用語の認知状況

小学校から高等学校における学校教育の中で寄付を学んだ人の割合は7.2％未満と少ないこと、また、寄付に関連する用語「NPO」「社会起業家」「社会的投資」「ファンドレイザー」「フィランソロピー」についての認知は低く、寄付についての知識・情報の発信・充実に必要性が高いことが挙げられている。

以上に示したわが国の寄付市場の概要から明らかなように、非営利組織にあっては、その活動趣旨、目的、そして寄付金の使用状況などを明らかにすることで、新たな寄付者を獲得することが可能であろう。今回、テーマにしているジュニアオーケストラにあっては、その活動趣旨、目的についてはすでに明らかにされており、演奏会などの実績や日常の弛まぬ努力をきちんと発信し理解されれば、さらなる寄付者の応援を得ることが可能になるだろう。

勿論、経営基盤の強化に当たっては、活動の経済波及効果や地域活性化効果などを明確にして、自治体等か

らの助成を受けることも必要である。公益法人や民間団体の助成制度の活用も積極的に取り組まなくてはならない。

６．ファンドレイザーの活用

ファンドレイザーという専門的ノウハウを持ったスタッフの活躍があれば、助成や個人からの寄付等も増やすことが可能となる。専門性の高い優れたファンドレイザーの育成にあたっては、自治体等がその支援を行い、それぞれの非営利組織が自らの力で経営の強化を目指せるような整備を行っていくことが望ましいだろう。

民間においては、2009年に設立された特定非営利活動法人日本ファンドレイジング協会が認定ファンドレイザー資格制度を構築し、プロフェッショナルファンドレイザーの育成に取り組んでいる。

ファンドレイジング人材の育成は、伊藤美歩氏によると「長期的には米国のように、ファンドレイザーという専門職が確立され、大学からオーケストラ、美術館からホール、といったように異分野間で行き来できるような人材が増えてくるだろう」と予測される。また、「日本国内にもすでに50名以上の認定ファンドレイザー、またはその予備軍である准認定ファンドレイザーも500名以上、生まれている」、とされる（伊藤美歩, 2016, 94）。

しかし、非営利組織内の専門的なファンドレイザーはまだ少ない状況であり、ジュニアオーケストラの実力や魅力とその地域活性化効果を余すことなく発信することはまだまだ十分とはいえないように思える。潜在的な寄付者へのアプローチはファンドレイザーという専門家による発信手法に頼ることが効果的ではないかと思う。

地方公共団体等によるファンドレイザーの育成にあたっては、すでにリタイアしており、企業で社会貢献活動を行ってきた方々にお願いすることはできないだろうか。様々なネットワークと経営の専門的な知見を持ち、社会貢献活動のネットワークなどを有しているシニアの方々の活動としてファンドレイザーをお願いできれば、シニアの方々にとっても社会貢献活動をするという満足感を得ることにもなり、ジュニアオーケストラの団員やスタッフは、その演奏技術の向上に邁進できるだろう。さらに素晴らしい演奏が期待できる。

それによって、地域のイメージアップが図れ、地域活性化に繋がるとともに、青少年とシニアの方々そして団員の保護者など同じ目的を持つものとして世代間交流が可能になり、連携もでき、ジュニアオーケストラと年代を超えた地域との交流が深まるなど、ジュニアオーケストラの持つ音楽を通じての文化力向上と経済波及効果だけでなく都市のブランディング向上効果など様々な効果が高まると考えられる。

総括

ジュニアオーケストラに対する地域の評価は高く、その活動の社会貢献効果は認められているものの、運営にあたっては安定した財源確保と優れたスタッフの育成に苦慮していることから、今後拡大が見込める寄付市場の活用を積極的に促すことが重要であると考える。

事例とした千葉県少年少女オーケストラの活動については、現在までの20年間は優れた指導者を擁し、国内外で活躍している指揮者による定期演奏会の開催や著名なソリストとの共演などにより確実に実力をつけており、レガシーとしての魅力に輝いている。しかしながら、今後必要になってくる楽器の買い替え、恒常的なプロの演奏者による質の高い指導や演奏会場（海外での演奏会も含める）などの課題を考えると、有志の寄付によって毎年の運営が支えられている現状では、さらなる飛躍に向けての安定性に欠けている。

ジュニアオーケストラにおいて潜在的な寄付者の寄付行為を積極的に促すファンドレイザーが活動することにより、ジュニアオーケストラは、多くの市民や企業、団体等からの助成を受けやすくなり、優れた演奏で文化振興を推進し、国内外から高い評価を得る「地域の宝」として都市の魅力アップに貢献できる。このようなジュニアオーケストラへの支援体制が求められる。

参考資料

FREUDE, 2016. http://www2s.biglobe.ne.jp/jim/freude/（情報取得2016.12.31）

伊藤美歩, 2016.「「共感型」ファンドレイジングの普及とファンドレイザーの育成」『ファンドレイジング・ハンドブック』全国公立文化施設協会.
鵜尾雅隆, 2014.『ファンドレイジングが社会を変える』三一書房.
岡山市ジュニアオーケストラ, 2016. http://www.oka-jo.com（情報取得2016.8.30）
公益財団法人千葉県文化振興財団, 2016. http://www.cbs.or.jp （情報取得 2016.10.3）
財団法人地域創造, 2012.「地域における文化・芸術活動の行政効果」『文化・芸術を活用した地域活性化に関する調査研究報告書』財団法人地域創造.
ジュニアオーケストラ浜松, 2016. http://www.hcf.or.jp（情報取得,2016.10.3）
仙台ジュニアオーケストラ, 2016. http://www.city.sendai.jp（情報取得2016.8.30）
千葉県環境生活部県民生活・文化課, 2016.『第2次ちば文化振興計画』.
千葉県交響楽団協会, 2015. http://iiwanet.com/csoa（情報取得2016.9.7）
千葉県吹奏楽連盟, 2016.『千葉県吹奏楽連盟創立60周年記念誌』.
千葉県・千葉県文化振興財団, 2016.『千葉県少年少女オーケストラ第20回定期演奏会プログラム』.
筒井隆志, 2011.「文化･芸術の持つ可能性」『立法と調査』(参議院事務局) (320).
筒井隆志, 2012.「芸術分野への助成の経済効果」『経済のプリズム』(参議院事務局) (99).
トリフォニーホール・ジュニア・オーケストラ, 2016. http://www.triphony.com/orchestra（情報取得2016.10.3）
日本ファンドレイジング協会, 2015.『寄付白書2015』日本ファンドレイジング協会出版.
畑農敏哉, 2015.『アマチュアオーケストラに乾杯！』NTT出版.
森玲子, 1987.『バッハ先生と1000人の子どもたち』二期出版.
森玲子, 1991.『ひろがれ、ぼくらのハーモニー』講談社.
山内直人, 2014.「ファンドレイジングとは何か」『情報の科学と技術』(情報科学技術協会) 64(8).